

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

八重紅大島桜に思いを寄せて

田中里子

久保山愛吉さんの命日が終わるころから大島桜の葉も色づきはじめる。第五福竜丸展示館の海沿いに、帰ってきたエンジンが設置され、その周りを取り囲むように久保山碑、大石又七さんの「マゲロ塚」そして東京地婦連が二〇〇〇年一月に記念植樹した八重紅大島桜がある。戦争の世紀とも言える二〇世紀に別れを告げ「二一世紀を平和の世紀に」の願いを込めた筈だった。あのテロから一年が過ぎた。ブッシュ大統領はニューヨーク湾に浮かぶエリス島からの演説の中で「テロリストは許さない、米国は強い自信を持つ」と呼びかけた。イラク攻撃をも視野においた米国の反テロ戦争の主張は、パレスチナ紛争でイスラエルに対抗する自爆テロの報復の悪循環を呼んでいる。

八月六日、秋葉忠利・広島市長が平和宣言の中で呼びかけた「憎しみと暴力、報復の連鎖の断絶」に、私は磐石の重みを感じる。九日には伊藤一長・長崎市長が米国の核兵器廃絶に逆行する行動を批判した。「世界の誰にもこんな思いをさせてはならない」と訴え続ける被爆者運動が私たちの平和運動の原点である。

私たちに何が出来るであろうか。東京地婦連では昨年十一月「アフガニスタンの子どもたちを救おう」友情のお年玉「キャンペーン」を行った。大人はもちろんだが、子どもたちに主旨を理解させ自分たちの運動にもっていかせよう、というのが狙い。「いまアフガニスタンではたくさんの小さなお友達が寒さの中、食べるものも着るものも足りません。あなたがお正月にいただいたお年玉からアフガンの子どもたちにとどかせませんか」とカードを組み込んだチラシを作った。暮れの二二日にJRR京葉線舞浜駅頭での街頭キャンペーンを皮切りに、一月半ばまで地域で呼びかけた。

和集会に行ったこともない人たちが積極的に加わった。

「戦争は人の心の中で生ずるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とユネスコ憲章は述べている。九月八日付の朝日新聞は日米両国民の世論調査結果を掲載している。米国のイラクへの軍事行動について日本では反対が七七%、米国では三三%と大きな開きがある。米国の姿勢に距離感や危うさを見出す日本が浮き彫りになっているのに正直ほっとした。

一九五四年三月一日、第五福竜丸が死の灰を浴び、久保山愛吉無線長が同年九月三日「原水爆の被害者は、私を最後にしてほしい」と言い残して亡くなったことが、地婦連のそして私の平和運動に火をつけた。原水爆禁止世界大会に全力を上げて関わったこともある。しかし、いまはむしろ地域に根を下ろす平和運動、子どもも若者も、中高年も高齢者もみんなが参加できる運動の育て役が担えれば幸いと思っている。

第五福竜丸展示館の見学者には小・中・高の生徒たちが増えていると聞く。八重紅大島桜の年ごとの成長に負けないように「二一世紀を平和の世紀に」のメッセージを現実のものとしてほしい。

(東京都地域婦人団体連盟常任委員、第五福竜丸平和協会評議員)

資料の寄贈

社会調査報告「焼津における漁師の婦人の生活」(おりづるの会編)

焼津在住の飯塚利弘さんより標題の社会調査の報告書(B5判)が印刷一八ページ、一九五四年八月二十八日に発行)が寄贈されました。これは、福竜丸事件の渦中にあった漁業のまち焼津の高校生のサークル「おりづるの会」(高校生一三人、大学生一人)により五四年七月末におこなわれ、まとめられたものです。焼津の漁師の婦人たちに話を聞き、封鎖的な土地柄、漁師の低賃金や貧困のもとで苦難する婦人たちの様子を明らかにしています。

調査は船方とその夫人百人に尋ねています。おもな質問項目は、「漁師という職業についてどう思うか」「収入と借金について」「内職について」「子供の将来について」「船元に対する不満・要求について」など八項目です。寄贈者の飯塚さんは、焼津の元中学教師、福竜丸事件の前年に赴任し平和教育、平和運動にたずさわっています。

わり、福竜丸事件や焼津の被災船について調べ、著作には、「死の灰を越えて」久保山すずさんの「道」「久保山愛吉物語」などがあり、第五福竜丸平和協会評議員でもあります。

「はやぶさ丸」への改造中の福竜丸の写真二枚

三重県伊勢市の奥村一郎さんより写真二点が寄贈されました。これは、福竜丸が一九五六年五月に水産大学練習船「はやぶさ丸」に改造するため、三重県の強力造船所に入れられたときに撮影されたものです。福竜丸の船名を麻袋で隠し、改造のため、木製の操舵室や船室は取り外されています。六月ころと思われまます。(写真真下)

「福竜丸だより」にて報じましたが、奥村さんはこのとき、福竜丸の操舵室など備品が造船所隣の銭湯に燃料として運ばれており、その操舵室の引き出しから「第七事代丸」と記された海図一〇枚をみつけ譲り受けて持ち帰りました。この海図のうち三枚は一九九八年一月に展示館に寄贈されています。

愛吉・すずのバラをひろめる会が発足、苗木を頒布

バラをはじめ草花を愛した故久保山愛吉さんの気持ち大切に、夫人のすずさんが育ててきたバラの花を、核兵器廃絶と平和への願いを込めて育てひろげようと、「愛吉・すずのバラをひろめる会」が発足しました。

この会は、立命館大学の国際平和ミュージアム館長の安齋育郎さん、ジャーナリストの筑紫哲也さん、千葉大学園芸学部の上田善弘助教らのよびかけで、すずさんが長年育ててきたクイーン・エリザベスとモンパルナスの二種を、



写真はモンパルナス (展示館)

千葉県佐倉市のバラ文化研究所で増やした苗木を頒布するものです。今回は七〇鉢を予定します。

申込者には、苗木とともに育てた方マニュアル、品種の由来、品種名を記したプレートが添えられ届けられます。また、年二回、ニュースレターを発行し、交流をはかります。頒布価格は苗木育成費、送料などをふくめて一万円です。

会の運営には、青年団、生協連、地婦連などとともに第五福竜丸平和協会も加わります。「愛吉・すずのバラ」の申込みは、日本青年団協議会事務局まで。住所 東京都新宿区霞岳町一五、一六〇一〇〇一三。電話〇三―三四七五―二四九〇 FAX〇三―三四七五―〇六六八まで。

日米の若者の交流をおして

吉 崎 明 博

今年五月、初めて第五福竜丸展示館を訪れた。展示館に足を踏み入れたとき、目の前にあるものが船だとわからなかった。その船は想像していたものより大きかった。そして、想像よりも大きかったのは船だけではなく、展示物からわかる被害の数々も同様だった。それまで長崎にも広島にも行ったことなかった私にとっ

て、それがはじめて原爆と向き合った瞬間だった。そのときは何を考えたらよいかわからず、ただ驚きと恐ろしさに押しつぶされそう

めだった。一九八五年に始まったこのプログラムは今年で一八年目を迎えた。主催の日米文化センターはアメリカ合衆国ワシントンDCを拠点とする非営利公益法人で主に米国内で活動を行っているが、日本国内での活動の一つがこの高校生交流プログラムだ。地球規模の問題について高校生が学び考えることを中心に行われ、これまでに一三三名のアメリカ人高校生が参加してきた。

たときの衝撃は言葉にできない。被爆した約半年後に亡くなられた乗組員・久保山愛吉さんの残した言葉を学んだ「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」。自ら犠牲になりながらも、これ以上の被疑者は増やして欲しくないと思った久保山さんの言葉は、私の心に大きな衝撃を残した。

た。八月六日、私は平和記念公園にいた。原爆投下から五十七年目を迎えるその地での平和記念式典に出席するためだ。私の隣にいたのは、ワシントンDCから来た高校生七名と被爆者の方、そして何万もの人々。平和記念公園に並べられた椅子が人々で埋め尽くされる様子を見ながら、こんなにも多くの人々が平和を願っているのかと、勇気づけられる思いがした。

八月の展示館より

夏休み期間中、宿題や夏休みの課題のために、連日、中学生、高校生が一〇人から二〇人と来館。ボランティア・メンバーに熱心に質問したり、話を聞く姿がみうけられ、協会としても「夏休みの自由研究のためのメモ」をつくり配りました。

夏休み体験学習会「牛乳パックでつくる第五福竜丸」は三回開かれ、七九名の小学生と付添い七〇名が参加、職員もボランティア・メンバーも初めての試みに学ぶことがたくさんありました。

八月二十九日には、エンジンの薬品塗布が、高校生などボランティア一二人によりおこなわれました。

この企画のために、まずは自分自身が原爆の被害について学ばなければならぬと思ひ、私は展示館を訪れた。そこで見たものは、それまで私が学校で学んできた「原爆」と、うまくつながらなかった。原爆は恐ろしいものだという漠然とした考えは頭の中にあっても、その恐怖を目の前にし

た。八月六日、私は平和記念公園にいた。原爆投下から五十七年目を迎えるその地での平和記念式典に出席するためだ。私の隣にいたのは、ワシントンDCから来た高校生七名と被爆者の方、そして何万もの人々。平和記念公園に並べられた椅子が人々で埋め尽くされる様子を見ながら、こんなにも多くの人々が平和を願っているのかと、勇気づけられる思いがした。

核兵器の被害は語り継がなければいけない事実であり、単なる過去として歴史の中に埋もれさせてはならない。久保山さんの言葉のようにもう二度とその過ちを繰り返さないためにも、それらについて学び、後世に伝えなくてはならない。いまアメリカの高校生に核兵器について学ぶ機会を提供したことから、語り継ぐことの手助けを少しでもしたいと思う。また私自身も大いに学び、今後、核兵器や世界が抱えるさまざまな問題について考え、ひとりの地球市民として、語り継いでいこうと思った。

(日米文化センター 高校生交流プログラム・スタッフ、大学二年)

本の紹介

西日本新聞連載

灼かれてもなお

日本被団協代表委員

山口 仙二 著
藤崎 真二 著

本書はつねに被爆者運動、核兵器禁止運動の先頭にある山口仙二さんの聞き書き(昨二〇〇一年一月から本年の一月末まで西日本新聞に掲載され好評を博したものをまとめたものです。「閃光」に打たれて、と題した第一章から「核廃絶の心」で世界を結ぼう、の第一〇章まで、どのページからも人間山口仙二の声が聞こえます。

一九四五年八月九日、三菱兵器大橋工場に動員されていた山口さんは、爆心から約一・一キロ。痛いほどに照りつける太陽のもと、パンツ一枚で塹壕掘りの作業をしていて被爆します。「地面にころがっている死体をいくつも乗り越え」て逃げ、走り、ようやく救援列車に乗り込みます。大村海軍病院のベッドに寝ている自分に

気づいたのは被爆数日後のことでした。上半身のひどいやけど、毎日死んでいく人がいた大村海軍病院——昏睡状態がつぎきました。「今、考えても私はよく生き残った」と山口さんは語っています。

「家の下敷きになり、炎にのまれる寸前の少女を見捨て——負傷者を置き去りにし——遺体を持ち越え……」「極限状況の中で、いわば地面からはい上がるために、自分の命だけを抱え、ひたすら逃げたのです。そうした多くの命が失われた中で、生き残ったことに対する後ろめたさ。何度、生きることを投げ出そうと思ったか——まるで「偶然が重なり、生き延びた」そのことの責を負うかのようにも語る山口さんです。

被爆者のそれぞれの命、それぞれの生活と意思を代弁するかのような山口さんの半生——「無差別殺りくをもたらす核兵器は絶対に許せない。それをなくして真の平和を実現する。そのために私の被爆後の人生があったと言ってもいい」半生は、同時に被団協結成から今日までの被爆者運動の歩みそのものです。

人道に反する核使用を糾弾し核

廃絶に生きる被爆者のよびかけは、真つ当、人間の尊厳を救い出すものです。現代に生きる人間の、その証人(あかしびと)として被爆者・山口仙二はあるのです。

本書にはいくつものエピソードも綴られています。すでに伝説的になった一九五四年七月の、カッターシャツにげた履きで(しかも無賃乗車で)単身上京。被爆者の治療費を国が負担してくれるように国会議員に頼もうと思立った行動でした。しかし国会は休会中——山口さん二四歳のときです。

山口さんは、そのかさねぬ人柄と優しさ、みんなから「仙ちゃん」とよばれて慕われていますが、こと、核や政治の不合理にたいする怒りは、時に激しくそれを許すことはありません。

この八月にも被団協の集まりや幾つもの平和集会で山口さんの声が聞かれました。好漢・山口仙二、原爆への怒りに生き、彼らとともに核廃絶の道に生きよと叱咤せよ。発行日本原水爆被害者団体協議会/編集協力 西日本新聞社 四六判 一一二〇〇円 (山村茂雄・平和協会理事)

八月の展示館より

夏休み期間中、宿題や夏休みの課題のために、連日、中学生、高校生が一〇人から二〇人と来館。ボランティア・メンバーに熱心に質問したり、話を聞く姿がみうけられ、協会としても「夏休みの自由研究のためのメモ」をつくり配りました。

夏休み体験学習会「牛乳パックでつくる第五福竜丸」は三回開かれ、七九名の小学生と付添い七〇名が参加、職員もボランティア・メンバーも初めての試みに学ぶことがたくさんありました。

八月二十九日には、エンジンの薬品塗布が、高校生などボランティア一二人によりおこなわれました。



撮影 岡崎聡介